

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 9 月 20 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01206

研究課題名(和文)独立後のインド音楽世界を文化資源化する知の統合研究

研究課題名(英文) Indian Music as Cultural Resource in Post-Independence Era

研究代表者

田中 多佳子 (Tanaka, Takako)

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70346112

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,100,000円

研究成果の概要(和文)：比類なき規模を誇るインド音楽世界の演奏家および演奏に関わる5つの情報源を個別データベース化し、さらにそれらを統合したデータベースを構築して、ネット上に公開した。用いたのは、国立音楽芸能研究所『音楽家名鑑』および『受賞者名鑑』、国営ラジオ局の演奏記録、マドラス音楽祭の第9回(1935)～第93回(2019)のプログラム、『オクスフォード・インド音楽百科事典』である。5つの個別データベースを、音楽家とラーガ(旋法)という2つの要素で貫く検索を可能にした統合データベースは、これまで茫洋としていたインド音楽世界を、誰にでもマクロな視点から量的にとらえることを容易にした共有の文化資源と言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インド音楽は、歴史的長さ、演奏家層の厚さ、様式的・地域的多様性等において他に例を見ない巨大な音楽世界である。我々、ミクロな視点から研究に携わってきた者には、ある種の直観的把握はあるが、それをマクロな視点から客観的なデータに基づいて検証することは不可能であった。この統合データベースの出現により、過去1世紀の時間軸の中に、演奏家の全体数、宗教別、性別、南北様式、器楽と声楽、楽器や楽曲形式、旋法や拍子等を、様々なファクターによるクロス集計と共に、具体的比率や概数により統計的に把握することが可能となった。研究者はもちろん誰にでもアクセス可能な一つの文化資源がネット上に公開された意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：We constructed five sources of information into independent databases related to performers and performances in the vast world of Indian music, boasting unparalleled scale. The five sources are Who's Who of Indian Musicians (1964 & 1984), Fellows and Award-winners of Sangeet Natak Akademi 1952-2010 (2011) by Sangeet Natak Akademi, Oxford Encyclopaedia of the Music of India (3 vols., 2011), performance records by All India Radio, all the programs from the 9th (1935) to the 93rd (2019) editions of the Madras Music Festival, and Oxford Encyclopedia of Indian Music. The integrated database that spans five individual databases, enabling searches based on two elements: musicians and rāgas (melodic modes), can be described as a shared cultural resource that has made it easier for anyone to quantitatively grasp the vast world of Indian music from a macro perspective, which was previously nebulous.

研究分野：民族音楽学

キーワード：インド古典音楽 文化資源 統合データベース インド独立後

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

インド亜大陸というヨーロッパ全体を超える広大な空間において、複雑かつ多層的な社会階層や宗教的背景を持つ多様な人々が、二千年を遥かに超える長い歴史の中で醸成してきたインド音楽は、世界に類を見ない規模と多様性を備え、かつ独立した音楽世界である。中でも古典音楽には、共通性と違いを持つ南インドの二つの音楽伝統があり、例えば、南インド音楽はヒンドゥー教徒の音楽家そして声楽中心、北インド音楽はよりムスリムの演奏家が多く、器楽中心といった、漠然とした傾向が指摘されてきたものの、その規模の大きさから具体的根拠を求めようが無かった。さらに、インド古典音楽の根幹をなすラーガと呼ばれる旋法の種類は、理論的には何千、実践的には何百などと実に曖昧なとらえ方しかできなかった。研究メンバーはいずれもがこのインド音楽の一側面に焦点を当て、ミクロな視点からアプローチした個別研究を続けてきたが、自らの研究を、マクロな視点からインド音楽世界の中に位置づけてみたいという欲求を抱き続けてきた。

そこで、本科研の研究分担者のうちの4名は、2013～2015年度、共同研究「インド音楽世界の定量的研究」(基盤C、2537093、田森雅一代表)に参加し、国立音楽芸能研究所(Sangeet Natak Akademi)による『音楽家名鑑(Who's Who of Indian Musicians)』(1964年版および1984年版、以下WWIM)所収の計3160件、音楽家計1712人分の全ての属性情報のデータベース化を行った。これを用いることによって、初めてマクロな視点からの量的把握や検証が可能となり、個別研究にも大きな示唆が得られたものの、単一の情報源によっており時代的にも限定的なものであったため、利用には限界があった。これに準じるような大規模で信頼に足る情報源としては、他にも、国立ラジオ局などによるものや音楽百科事典などが考えられるものの、いずれも、情報の性格や集積方法、対象とする音楽の様式や音楽分野、地域差や対象とする期間などが異なっている。したがって、いずれかの情報源を選択するのではなく、複数の情報源を組み合わせることで媒体による偏向を減らすと共に、より広範囲で多様な情報がカバーできるような統合データベースを強く切望するようになった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、我々自身のミクロな視点からの個別研究の助けとするために、インド音楽全体を見渡し、マクロな視点から統計的にとらえることを可能にするビッグデータを構築することである。それが構築されれば、我々のような音楽研究者はもちろん、実践的音楽家や愛好者、またインドの関連機関にとっても有益なものとなることは疑いなく、この種のデータを必要とする誰もが活用できる、インド音楽の文化資源たる統合データベースの構築を目指した。最も把握したい事項は、インド音楽世界における「主な音楽家」の概数、その中の南北音楽様式・宗教的属性・ジェンダー等のバランス、時代による変化などである。さらに、もう一つの事項は、理論ではなく、今日、実際に演奏されているラーガ(旋法)の概数および南北差などの把握である。それらのクロス集計が可能となれば、ミクロな視点からの個別研究も飛躍的に発展させることができ、新たな課題の発見へとつながるであろう。

なお、科研のタイトルを便宜的に「独立(1947年)後のインド音楽世界」としているが、用いた情報源には19世紀後半に誕生した音楽家やその師匠に関するデータも含まれるので、イギリス支配下で隆盛を極めてきた南北古典音楽の音楽伝統の後半をカバーする過去約1世紀間がこのデータベースの対象範囲に含まれることになる。

3. 研究の方法

3-1. 情報源の収集および選定

まず初めに、信頼に足る機関が収集した、南北や宗教・性別などの偏向なく期間的にも幅のある情報源を探し、入手に努めた。最終的には、前科研で構築したWWIMに加え、それと同じ国立音楽芸能研究所による『受賞者名鑑 *Fellows and Award-winners of Sangeet Natak Akademi 1952-2010*』(2011、以下SNA)に掲載されている半世紀間の間に様々な賞を受賞した音楽家の一覧、インド国営ラジオ局(All India Radio)がpdfファイルで公開した放送演目一覧(以下AIR)などをデータベース化の対象とした。

さらに、インドで最も長く続く、大規模な南インド古典音楽の祭典「マドラス音楽祭 Madras Music Festival」で、第9回(1935)から発行されるようになったプログラム冊子(*Souvenir*)を第93回(2019)分まで集め、そこに記載されている全ての演奏曲目について、演奏者、楽器や演奏形態、作曲家名、ラーガ名、ターラ(拍子)名、音楽様式などのデータを入力したデータベース(以下MAM)を構築した。これは、南インド古典音楽に偏っているとは言え、権威と伝統を誇るマドラス音楽院(Music Academy, Madras)が、1927年から今日に至るまで毎年途切れることなく開催してきた音楽祭の、実に85年分の詳細な演奏データは、単独でも非常に価値のあるものである。

加えて、『オクスフォード・インド音楽百科事典 *Oxford Encyclopaedia of the Music of India*』(3 vols.、2011、以下OEMI)掲載の現代の音楽家名とラーガ名の項目のみの一部データを、他の

データベースを補完し参考とするために用いた。

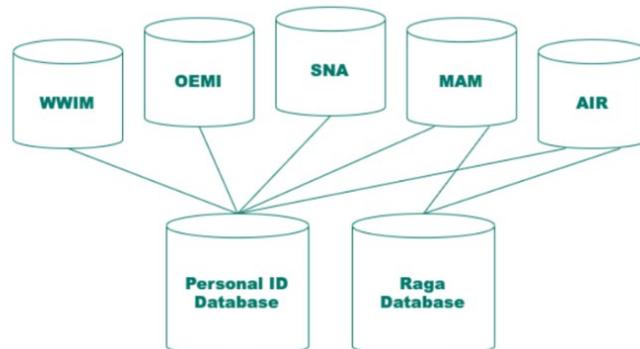
3-2. 基礎データの収集および入力作業

WWIM 以外の、SNA、AIR、OEMI は、作業員が、我々が定めた項目や記述方法に従って、我々の監督下で、冊子や pdf から一々判断しながら入力した。SNA は複数回も含め何らかの賞を受賞した音楽家や文化人 1320 名分に関わるデータで、田森が監督した。田森は、自らの研究目的に沿うように、WWIM と SNA に性別と宗教の項目を新たに追加し、3 度の作業部会を開き、小日向・田中と共に、姓名や他のデータなどから一つ一つ判断して全入力を完了させた。AIR は、国営ラジオ局ホームページに公開されていた、放送用に録音された音楽の演奏家名も含む 4 種の演奏データ一覧で、北インド古典声乐 5541 曲、北インド古典器楽 4053 曲、南インド古典声乐 2547 曲、南インド古典器楽 2126 曲、以上合計 14266 曲分の演奏内容を記した一覧表である。そのうち、北インドについては岡田が、南インドについては田中が監督した。録音年月日が空欄のものも多いが、全体的には 1939 年から 2003 年までと長期間にわたる記録であった。MAM は小尾が担当したが、まずプログラムそのもののバックナンバーを収集する必要がある。国内で入手が叶わなかった分については、小尾が現地に赴き、マドラス音楽院の図書館で許可を得て、数日間をかけて原本をスキャンした。舞踊や宗教儀礼などは除き古典音楽の演目に絞ったものの、数と項目は膨大なものであり、MAM の入力作業が最も困難を極めた。小尾が監督し、研究のために必要な作曲家に関わる項目などを加えものの、85 年間に演奏された曲は結果的に 28837 曲に上った。このように、基礎データ入力作業は、研究メンバーの監督の下に、田中が現場の指揮をとり、延べ 6 人の作業員が延べ 3 年間で 2021 年度内に全て終了した。

3-3. 統合データベースの構築

2022 年 5 月より、正式に業者を決定して、統合データベースの設計・構築に関する段階に入った。メンバー間で共有するためにもドメインは早々に取得し、トップデザインを定めて、基礎データをすべてアップした。“Integrated Database for Indian Music and Musicians as Cultural Resources” (idim-jp.org) である。研究メンバーは、これを試用しながら、研究会で課題を出し合い、検討して方向性を決定した。それを受けた具体的解決については、業者と小日向・田中の 3 者で、基本的に週 1 回の作業部会を開催して検討・修正を重ねた。(作業部会による詳細な修正作業は本報告書提出時にも継続中である。)

当初から抱いていた右図のような構想に従い統合作業を進めていった。構想は明確なもの、実際に運用を試みると大小様々な問題が相次いでみつき、メンバーの時間的・労力的限界もあり、完成は困難を極めた。課題は、構造や検索システム、表記法の統一や項目設定、仕様に関わるものなど多岐にわたったが、最大の課題は、WWIM、SNA、MAM、AIR、OEMI という音楽家名を含む 5 つのデータベースを共通する音楽家の ID で、また、MAM と AIR という 2 つの演奏データのデータベースを共通するラーガの ID で、貫いて検索するための具体的方法に関わるものであった。



4. 研究成果

4-1. 統合データベースの意義

統合データベース構築以前に、まず、独立前から途切れることなく続けられてきた、インドで最も長く伝統あるマドラス音楽祭の全プログラムの全データのデータベース化 (MAM) は類を見ない大事業であり、これだけで十分価値のあるものと自負する。これは、南インド古典音楽に偏っているとは言え、そもそも北インド古典音楽は、即興主体という音楽の性格上、演奏の詳細 (音楽家名はもちろん演奏曲目にあたるラーガ名や拍子にあたるターラ名等) をプログラムに記載するという習慣がないので、これに匹敵する情報源はない。本研究においては、北インド古典音楽の演奏に関わるデータとしては AIR にのみ扱うことができ、分析可能となった。

最終的な全体のデータ数は表のようになった。OEMI については現在、2000 人以上のデータをアップしてあるが、今後も修正作業を継続して音楽家の人数を確定して後、それに一致するデータのみを残すため、ここでは省く。

本研究最大の関心事の一つ、インド音楽世界における「主な音楽家」の概数とはどのような規模であったのか。4 つのデータベースの音楽家数は単純合計 7055 人となったが、これらを貫く音楽家 ID (Personal ID) をつけ、重複分を減らす作業を続けていった結果、現時点では 6165 人となった。予想をはるかに超える人数となった一因には、データベース単独で 2946 人と他の倍

以上の人数となっているMAMには、一度しか出演していないような無名の音楽家が多く含まれていることが考えられる。さらに、現在も細かい修正作業を続ける中で、6165人という数はまだ流動的で、数百の範囲で減ることが予想される。

	件数 (単位)	音楽家数(人)	ラーガ数	
WWIM	3,160 (項目)	1,712	6,165	南 北 666 612
SNA	1,320 (人)	1,320		
MAM	28,837 (曲)	2,946		
AIR	14,266 (曲)	1,077		
合計	47,583 (件)	合計 7,055	6,165	合計 1,278

そうであったとしても、当初、音楽家名鑑に掲載されたり、名誉ある賞を受賞したり、国営ラジオ局に出演したりといった、インド音楽世界で一定のステータスを認められた音楽家はデータベース間で重なり、せいぜいで3000人程度に絞られるのではないかとこの予想をはるかに超え、1世紀にも満たない中で5000人を超えるとの数字を見ると、改めてインド音楽世界の大きさを実感させられた。

もう一つの関心事は、今日、実際に演奏されているラーガの概数であった。MAMとAIRという演奏情報のデータベースを統合して、ラーガIDで検索できるようにした点も、この統合データベースの大きな特徴である。鳴り響く旋法としてのラーガの実態は確かめようもないので、ここでは記述されたラーガ名の綴りのみを頼りとして同定し、ラーガIDを付して統合した。

「ラーガ」欄に複数のラーガ名が書かれているもの(ID:999)や判別不明なものを除く(ID:000)と、最終的に演奏されたラーガ数は、南インドでは666、北インドでは612に絞られ、南北ほぼ同規模となった。従来、理論的には南インドのラーガは5000を超え、調査からは音楽家個人が演奏するラーガはせいぜいで150~200、北インドの音楽大学在学中に学ぶラーガは100未満といったような雑駁な把握しかできなかったが、この統合データベースにより初めて統計的・量的説明が可能となった。例えば、南インドのラーガ666のうち、マドラス音楽祭の演奏曲28837曲中、最も演奏頻度の高かったラーガはラーガ・トーディーで1029曲、次いでラーガ・カルヤーニの1024曲、200曲以上演奏されたラーガが36あった。一方、1回しか演奏されなかったラーガは206に上るなど、人気のあるラーガ、めったに演奏されない珍しいラーガの別を量的根拠を用いて示すことができるようになったことは画期的である。

4-2. 研究成果発表と今後の課題

2023年11月に東洋音楽学会大会で共同研究発表の機会を持ち、構築中のデータベースを公開し、各々の視点からその有効性と可能性についての発表を行い、民族音楽学者たちの意見を求めた。インド音楽という他に類を見ない規模と広がりを持つ音楽だからこそ成立する手法として注目を集め、その行末に強い関心が寄せられた。

2024年1月28日に最終研究発表会を開催し、この統合データベースの構造と仕様の説明に加え、メンバーが個別研究発表を行った。全員がこの統合データベースを用いて初めて明らかとなった知見を披露し、今後、各々の研究の方向性を明らかにした。フロアからは、仕様についての質問や期待の声、またこれに追加すべきさらなる情報源の提案などが寄せられた。

田森は、北インド古典音楽に限定して、宗教的属性とジェンダー、時代的・ジャンルの要素をかけた量的分析を行い、質的分析と接続する精力的な研究を展開している。小尾は、MAMを用いることになって初めて可能となった、特定の楽曲様式に注目し、作曲家やその属性、演奏順、時代による変化などを勘案した新しい研究を進めつつある。岡田は、北インドのラーガに注目し、この統合データベースによるエディックな視点と教育システムなどイーミックな視点とをかけた研究を進めている。小日向は、統合データベースの修正作業を田中らと共に継続しながら、これをインド音楽に関わる映像や録音などのデータベースと接合したさらなる文化資源化の可能性を模索している。

5年間を費やして構築してきた本データベースは、一応の完成は見たものの、残念ながら未だ完璧とは言い難く、今後も当面は補修作業を継続してゆくことになるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 田中多佳子	4. 巻 87号
2. 論文標題 書評「小尾淳著『近現代インドのパラモンと賛歌：バクティから芸術、そして『文化資源』へ』」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東洋音楽研究	6. 最初と最後の頁 75-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小尾淳	4. 巻 1月号
2. 論文標題 南インド古典音楽界の光と影	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月刊みんぱく	6. 最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田森雅一	4. 巻 下巻
2. 論文標題 われわれのカーストをめぐる再帰的多声 ムスリム世襲楽師たちの言説空間とライフ・ポリティクス	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 南アジアの新しい波 下巻 環流する南アジアの人と文化	6. 最初と最後の頁 79-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田中多佳子	4. 巻 18
2. 論文標題 即興演奏の意味と指導法を考える 音楽科における北インド古典音楽の教材化に向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本音楽教育学会『音楽教育実践ジャーナル』	6. 最初と最後の頁 18-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田森雅一	4. 巻 46
2. 論文標題 環流現象と音楽伝統の変容 インドとフランスを結ぶ再帰的グローカル化の諸相	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』	6. 最初と最後の頁 51-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小尾淳	4. 巻 10
2. 論文標題 近現代南アジアのパラモンと賛歌 20世紀の音楽界の動向に焦点をあてて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京外国語大学拠点 南アジア研究センター『FINDASリサーチペーパーシリーズ』	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tanaka Takako et al	4. 巻 2020
2. 論文標題 Uncovering the history and future of Indian music: A comprehensive Indian classical music database	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Impact	6. 最初と最後の頁 62-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 岡田恵美	4. 巻 48 巻 4 号
2. 論文標題 Performing, Teaching, and Listening to Ragas in Hindustani Classical Music	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 国立民族学博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 429-474
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小尾淳
2. 発表標題 ヒンドゥー賛歌の『価値』に関する一考察 南インドのバラモン階層との関係に着目して
3. 学会等名 東洋音楽学会東日本支部12月例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Terada Yoshitaka
2. 発表標題 Caste and South Indian Music
3. 学会等名 The Arduous Arts: Caste, History, and Politics of "Classical" Dance and Music in South India, University of California, Los Angeles, Center for India and South Asia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小尾淳
2. 発表標題 近現代南インドのバラモンと賛歌：バクティから芸術、そして「文化資源」へ
3. 学会等名 2020年度FINDAS第一回若手研究者セミナー「南アジアの文学・芸能と社会」（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 田森雅一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 南アジア地域研究・国立民族学博物館拠点	5. 総ページ数 43
3. 書名 近現代インドにおける音楽伝統と社会的レジリエンス ラージャスターン世襲楽師コミュニティの民族誌に向けて 』（MINDAS Series of Working Papers No.5）	

1. 著者名 田森雅一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 28
3. 書名 「越境し環流する音楽文化 フランスにおけるインド伝統音楽の再帰的グローカル化」 『世界を環流する<インド> グローバリゼーションのなかで変容する南アジア芸能の人類学的研究』	

1. 著者名 寺田吉孝	4. 発行年 2020年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 28
3. 書名 「南インド古典音楽・舞踊の漂流」、松川恭子・寺田吉孝編 『世界を環流する<インド> グローバリゼーションのなかで変容する南アジア芸能の人類学的研究』	

1. 著者名 寺田吉孝	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 8
3. 書名 「ペリヤ・メーラム音楽における伝承形態の変容」 『儀礼と口頭伝承』	

1. 著者名 小尾淳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 366
3. 書名 近現代南インドのバラモンと賛歌 バクティから藝術、そして「文化資源」へ	

〔産業財産権〕

[その他]

Integrated Database for Indian Classical Music(<https://idim-jp.org/>)

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	寺田 吉孝 (Terada Yoshitaka) (00290924)	国立民族学博物館・その他部局等・名誉教授 (64401)	2023年3月削除
研究分担者	小日向 英俊 (Kobinata Hidetoshi) (00399742)	東京音楽大学・音楽学部・客員教授 (32646)	
研究分担者	田森 雅一 (Tamori Masakazu) (10592454)	愛知大学・国際コミュニケーション学部・教授 (33901)	
研究分担者	岡田 恵美 (Okada Emi) (60584216)	国立民族学博物館・人類基礎理論研究部・准教授 (64401)	
研究分担者	小尾 淳 (Obi Jun) (50759628)	大東文化大学・国際関係学部・准教授 (32636)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	井上 春緒 (Inoue Haruo) (80814376)	京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・特任研究員 (14301)	2020年5月削除

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関